

はず、それらを物々交換にすればおたがいが喜ぶことだし、その荷物を大連に持ち帰って、いつ引き揚げが始まるかわからぬ人たちに安く売り、奉天、新京の情報も提供しようと、満鉄の作業服も入手し、ラポター（労働者）の腕章を準備し、いつ出発するか不明の中に連絡を待つことにした。

終戦の思い出

奈良県 菅 恒子

今年も終戦記念日が参りましたが、その度にいろいろの思い出が走馬燈のように頭に浮かんで参ります。

その当時の日本人は、何処に住んでいようと、それぞれにご苦労があつて、私よりもっと、もっと苦しまれた方も多いと思っています。

主人と私と子供二人で引揚げて参りましたが、そのことを考えてみても、私は幸せだと思っています。主人も今は病気をしていますが、何とか自分のことは自

分で出来ますし息子達二人も結婚して長男の娘も昨年秋、結婚して親子共にアメリカに住んでいます。

毎年思い出すことは断片的ですが自分も年をとつて来ましたので一度書いて置きたいとこの機会に筆をとつてみました。

主人が満州で現地召集になりましたのが終戦の年の五月十五日、新京神社のお祭の日だったと思います。長男の手をひいて、次男はおおつて、主人に手を振つて行つてらっしゃい、と気軽に送つたものです。

片耳聞えない主人は丙種で兵役をまぬがれていたのですが、片方の耳が聞えればよいとのことでした。その後消息はわかりませんが、当時外交部の近くで、訓練に励んでいる兵隊さんを見る度に、この人達も召集されたのだろうかとお胸が痛んだものです。

二男がお乳が足りなくて毎日牛乳の配給を頂きに行つていましたが、友達の叔母さんが勤めている陸軍の酒保（軍隊の売店のこと）という所に伺つた時に目を見張るものを売っており、びっくりしたものです。

鯖だったと思いますが生き／＼としていて、とても

私達の口に入るようなものではありませんでした。そして浴衣の反物が置いてあり、やはり軍隊は違うのだと思いました。このことは終戦になり、私の家に一時宿泊していた人々が軍隊の官舎に移られ、持つて来て下さった、味噌、醤油、小麦粉、そば粉等、本当に當時有り難かったのですが、有る所には有るものだと不審を抱いたものです。

八月九日にソ連が参戦したということで、空襲警報が鳴る度に主人が掘ってあつた庭の防空壕に入り、遠い所に砲弾が落ちて、地響きが体に伝わって来ました。私も若かったので余り恐いとも思いませんでした。窓側にラジオを置き、ニュースを聞く度に子供をしっかりと育てなければと責任を感じました。

召集軍人の家族は疎開することになり、当時私は体をこわし、心臓をすこし悪くしていたものですから、残りたいと申しましたら、皆の手足まといになるからと言われ皆さんと一緒に吉林に疎開することになりました。山の中に疎開するので、冬支度をして行かねばと言うことで、長男にはオーバーを着せてリックサツ

クを背負せ、私は二男をおぶって綿入れの「ねんねこ」を着て、とに角身につけられるものはつけて、荷物は少しでも少なく、といっても、とても持てるものはなく、新京駅迄運んで下さいました。

新京駅に多勢の人が集り三年分だつたと思います給料を頂いて汽車に乗り込むことになりました。

突然ソ連の飛行機が飛んできて来て燈火管制になりました。真暗の中に長男の手を引いて「離れなさんなよ」と言つて前の人について進むのですが本当に暗闇みの中で、子供の手を離さないことと前の人を見失わないようにと一心でした。

毎年、戦争孤児の方々が日本にいらつしゃいますが当時のことを思い出しますと、ぞつとして体に鳥肌が立ちます。ハルビン駅で親子が手を離したばかりに別れ別れになった方も多く有つたと聞きますと胸がジーンとしめつけられるような気が致しました。

吉林行き列車に乗りましたが吉林行きは中止になり、朝鮮の鎮南浦に行くことでした。

次男は飲むお乳もなく、いり米をかんで口に入れ

てやりました。八か月で離乳食でしたので少しは助かりましたが、とう／＼足が立たなくなってしまうました。

お世話して下さいの方が一時列車を止めて、小さい子供のためにスープを煮て下さいました。

やっと少し元気を取り戻しました。当時の鉄峯の駅に一時停車したとき主人のお友達がいることをかね／＼聞いておりましたので、さがして頂きましたら飛んで来て下さいました。

「待っていなさい。食べるものを持って来ますから」と言つて、一面識もなかった私に、いろ／＼な物を持って来て下さいました。庭にできたトマトだと言つて沢山下さいました。用意してあった炒つたお米を缶に入れて下さった時、人の親切が体に伝わって来て胸が熱くなりました。

みんなの目の前で、買い溜めしておいた粉乳と思うものを飲ましていらつしやるお母さんと子供がおり、私の二男と同じような年齢の子供さんは丸々と肥つて、自分のお乳も吸わせていらつしやいました。

少しでも分けてほしいと思いましたがこの先どうなるかわからないのに、人にあたえるミルクなんか有りませんもの。よくわかつていながらうらめしく眺めていました。

この時初めて人の心の奥をわかせて頂きました。戦争のない平和な世の中、もつとお互いのことを思いやれる世の中にしたいいものです。

緑園

鳥取県 福永義久

昭和十七年三月、母姉と三人は父(元満州国宮内府)の在する特別市緑園住宅へと父の弟に連れられて行きました。この住宅は大きく、ベチカつきで廻りには畑、共同井戸、近くに学校食糧引替所等あり、住宅地をすこし出ると山の無い中国大地が広がり、開墾して野菜を作り野草を摘みと夕焼を見によく出かけたものです。冬の楽しみは玄關の外の廻りに夕方水を撒き朝ス